

都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷2-35-10
本郷瀬川ビル TEL 03-3812-6664

TELEPHONE 03-3812-6664
FACSIMILE 03-3812-6828

JUDI

066

20.MAY
2002

特集
「時間環境デザイン－序論」

発行者：都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●特集：時間環境デザイン	
0. 時間環境デザイン－序論	1
1. スローフードと都市環境デザイン	2
2. 保存修理の現場にて	3
3. 著らしの場としての歴史的環境における 観光のあり方	5
4. 湯布院発「ひとよこい」なまちづくり	6
5. 都市環境のライフサイクル制御	8
●代表幹事会アーツカツダ・トプカツ	11
●第12期定例総会	12
●事務局より	14

特集：「時間環境デザイン－序論」

昨今ファーストフードの対義語としてスローフードなる新語が流行っています。これは“食”においてですが、“住”あるいは“業”に対応する空間、つまり都市においても、時間を効率性の観点から捉えそれを保証する空間すなわちファーストスペースに対し、時間を人の身体感覚や感性の観点から捉えたスロースペース…、という提起がなされています。

都市を時間の観点からみようということですが、この点についてはあわせて議論すべきことがいろいろとあります。例えば、従来から都市内で歴史的な建造物や街並を保存する試みが数多く行われてきています。これらは最近、近代化遺産を含め観光と結びつくなどして、さらに盛んになってきています。つまり街のなかで保留された過去の時間をどう扱うか、ということです。また観光地においても、体験型観光が盛んになってきています。でかけた先での、非日常体験が心を癒す、それはすなわちその土地の風土と共にある固有の時間に浸ることではないでしょうか。さらに近年、環境共生が都市づくりの大きなテーマになり、従前からいわれている“成長管理”をさらに進めた“サステナブル”的観点から都市の成長・更新を適切にマネジメントしようというふうになってきています。これも都市の時間あたり活動量と、周囲の自然の時間あたり環境容量をいかにすり合わせるかという点が基本になっています。

以上、いずれも、“時間”が関わる都市づくりの課題です。そしてそれが21世紀になって都市を見直す視点としてますます比重を高めてきているテーマではないでしょうか。都市を、あるいはその中の特定の場所を考えるにあたり、“時間性”に関し、より踏み込んだ議論が必要とされています。

都市を時間の観点から見る場合、都市内で過去の時間がそのまま滞留する場所が有り、また優れてカレントリーな場所も有り、という具合で、過去と現在が共存するという“時制的”観点があります。また時間が、相対的に見て早く進んだり遅く進んだりする、異なる“時間速度”を有する場所があるといった観点もあります。さらには都市と周辺の環境における時間性の整合といった課題もあります。

つまり街のあちこちで実態として時間の位相差が存在しています。しかるに都市は、その状態をきちんとふまえた上で、適度な時間の位相差を擁しつつ存在するべきで、それこそが人の暮らしを育む器である都市の必要条件だろうと思います。

こういった時間性の観点から都市を見直し、時間を適切に扱う環境デザインを考えてみること、すなわち人が人らしい時を過ごす場としての都市をデザインすることが、これから時代、特に大切ではないのでしょうか。それをここでは“時間環境デザイン”ということとしました。そしてこの考え方は、これから環境デザインに大きな示唆を与えるような気がします。

時間環境デザインは、技法論もなかなか興味深いのですが、まずは都市論レベルを含んで語るべきことのような気がします。そのほうがみのりが大きいと思われるからです。従って本特集では、時間環境デザインをテーマとし、その序論として、それぞれの分野・地域からの考え方の提示を執筆者にお願いしました。これをきっかけに時間環境デザインに関する議論が盛り上がることを期待しています。

(文責：地域まちづくり研究所 伊藤光造、編集協力：地域環境デザイン 石崎均)

スロースペース と都市環境デザ イン

木下 勇

KINOSITA ISAMI

千葉大学園芸学部
助教授

「オソイホド ハヤイ」ⁱ

時間貯蓄銀行の灰色の男たちに盗まれた時間を取り戻しに進もうとするモモの苦難に、亀のカシオペイアがヒントを与えてくれる。そしてモモは後ろへ向いて前へ進む「さかさま小路」の謎を理解し、失われた時間を取り戻すことに成功する。ミヒャエル・エンデ (Michael Ende 1929~1995) の有名な童話「モモ」は時間の観念からの文明批評と認識されているが、実はグローバル化するマネーに支配される人間社会の危険性を指摘していたと言われるⁱⁱ。Early eat Slowⁱⁱⁱ、時は金なりの競争原理はIT時代、グローバルスタンダードとの冠で世界を席巻しているが、富を蓄積する者と飢えに苦しむ者との格差をも助長させている。しかし、その富も虚構にすぎないことを、相次ぐ倒産劇や政財界のスキヤンダルが物語る。速さの追究はエネルギー消費、環境汚染の加速ともなるが、しかし汚染物質に対する自然環境の浄化能力による速度には一定の限界があり、許容量以上のモノは処理できない、ということも自明である。これを環境時間^{iv}というが、我々の生活の速度も環境や持続可能性を考えればスローダウンすることが必要かも知れない。ローマクラブが『成長の限界』の警告を発してから既に30年が経過している。まだ我々はうまくシフトダウンできずにいるが、『エンデの遺言』から地域通貨の試みが広がっているように、新しい動きも出現している。

スロースペースとは空間に時間性を組み込んだ概念である。もともとは、ある建築評論の本からの引用である。Michael Bell は John Hejduk の Bye House を引用して、スロースペースの具体例としている^v。住宅の固定観念をひっくり返したような長い直線状の動線形態のこの住宅を環境への人間の主体性を契機させるものと意味づけている。ここではこの言葉を都市空間にまで広げて、都市のあり方を考える道具として取り入れようと考えた次第である。いわば都市の空間において、人々がゆったりとした時の流れに身をおいて自分が生かされる空間とでも言おうか。

ここでスロースペースという概念に着目したのは都市空間自体が時間貯蓄銀行の灰色の男に時間を売ってしまったかのように、本来人間が主体性を持ちうる、ゆったりとした時間の流れに生かされる空間が失われているという問題意識による。市街地再開発事業や総合設計制度等の都

市開発事業はそれ自体が経済の枠組みの中にあり以上、時間貯蓄銀行と同様の論理が働き、生み出されるオープンスペースも足早に人々が通りすぎる空間(ビジースペース)となったり、違法な自転車駐輪場といったデッドスペースになったりしているのではないだろうか。都市の開発は公共の福祉を大命題にあげながらも、それによって生み出される公共空間は一見華やかでありながら、モモがいる円形劇場の遺構のように、人々が集まり、話し込んでいるうちに悩みも問題も解決するようなコミュニケーションの場とは程遠い。しかし、よく探してみると都市の開発の位相差は局部的にもその位相差のためにこのようなエアーポケットのようなスロースペースをも生み出しているのではないだろうか。

「私たちは、過去を選択し、変化させ、現在の中で過去をつくり出していかなければならぬ。過去を選択することは、未来の建設を促進することである」^{vi}とケビン・リンチは『時間の中の都市』の中で言う。その中でリンチは「内部の時間」というキー概念を提起している。『都市のイメージ』で人の経験や愛着といった内面の空間を解きあかしたリンチが晩年、内面の時間でテーマにした点は興味深い。また遺作となった『廃棄の文化史』^{vii}は今日の環境問題とも絡み合う、「モノの時間性」を問いか直す。

そもそも時間と空間とは切り離せない関係にある。空間も現実社会では制止状態ではなく、空気も流れるし、生き物も我々も動く。「時間よ止まれ！」というような芸当はできない。時間と空間は古来、哲学の中心テーマでもあった。例えばカントは「感性の二つの純粹形式であるところの空間 (Raum) と時間 (Zeit) とが、ア・ブリオリな認識の原理」と言う^{viii}。またハイデガーは人間存在 (Dasei) を時間性 (Zeitlichkeit, Temporalitaet) から説明した。リンチの「内部の時間」、ハイデガーの「内部時間性」、また遡ればカントの「時間は内感の形式」というようにそれらは知覚する人間に存在をみる。「時間性の脱目的統一の視界的構え(地平的構造)にもとづいて、そのつどかれ (おのれ) のく現 > (Da) である存在するものに、開示された世界といったものが属している」とハイデガーはいう^{ix}。過去の記憶や未来の予見といった過去、現在、未来という時間の次元を開き、脱目的に遠く離れてみて環境世界にいる自分の存在を了解することが

ⁱ エンデ M 「モモ」 大島かおり訳、岩波書店、1980, p310

ⁱⁱ 河邑厚徳+グループ現代『エンデの遺言』 NHK 出版 2000

ⁱⁱⁱ 植田一豊(2000):「デカンショじいさんの読書会」資料より

^{iv} ソーラーシステム研究グループ『循環都市へのこころみ』 NHK 出版、1994, p61

^v Michael Bell & Sze Tsung Leong, "SLOW SPACE", The Monacelli Press, Inc. and The Future Project, 1998, p15-24

^{vi} ケビン・リンチ(1972)『時間の中の都市』(大谷幸夫他訳), 鹿島出版会, 1974, p.90

^{vii} ケビン・リンチ(1990)『廃棄の文化史』(有岡孝、駒川義隆訳) 工作舎, 1994

^{viii} カント E (1787)『純粹理性批判 上』(篠田英雄訳) 岩波書店, 1961, p88-89(原 36-37)

^{ix} ハイデガー(1927)『存在と時間 下』(桑木務訳) 岩波書店, 1960, p120(原 366)

^x 木田元「ハイデガー『存在と時間』の構築」岩波書店, 2000, p125

^{x i} ハイデガー(1927)『存在と時間 下』 p56(原 329)

^{x ii} ハイデガーはこの概念を 1928 年の講義ではじめて持ち出し（「論理学の形式学上の基礎—ライプニッツから出発して」）、これは「時間性の諸脱自態の地平図式」と同じと木田は分析する。木田、前掲書、p123。

^{x iii} 西田幾多郎（1927）『場所』（上田閑照編 西田幾多郎哲学論集、岩波書店）p102

^{x iv} 和辻哲郎（1935）『風土』岩波書店、p15-16

^{x v} ハイデッガー前掲書 p123（原 368）

^{x vi} ハイデガー（1928）「論理学の形式学上の基礎—ライプニッツから出発して」p396

^{x vii} デリダ.J 『エクリチュールと差異』（若桑毅ほか訳、1977）東京大学出版会、ドゥルーズ.G 『差異について』（平井啓之訳、1989）、青土社など

できるという意である^x。「時間性というものは根源的に『脱=自』それ自身なのです」とハイデガーは言い、将来、既在（過去）、現在という特性づけられた諸現象を、時間性のもろもろの脱自態^{エクスター}と名づけた^{x i}。その脱自態から見通す地平、脱自態とともにあらわれる地平（包み込む空間）を脱自場^{エクステーマ}といいう^{x ii}。スロースペースも本質的にはこの脱自場に近いであろう。

西田幾多郎もまた次のように言う。「空間も、時間も、力もすべて思惟の手段と考えられた時、与えられた経験其者の直に於てある客観的場所は超越的意識の野といいう如きものでなければならぬであろう。」

^{x iii} その客観的場所を風土に展開したのが和辻哲郎である。和辻は次のように言う。「人間存在の空間的・時間的構造は風土性・歴史性として己れを現わしてくる。時間と空間との相即不離が歴史と風土との相即不離の根底である。……精神が自己を客体化する主体者である時にのみ、従って主体的な肉体を含むものである時にのみ、それは自己展開として歴史を造るのである。このような主体的肉体性とも言うべきものがまさに風土性なのである。人間の有限的・無限的二重性格は人間の歴史的・風土的構造として最も顕わになる。」

^{x iv}

西田の言う「純粹経験」や和辻の身体性^{エクスティーピー}は脱自場としてのスロースペースの再発見に重要な手がかりを与える、また今日我々が直面する環境問題と主体の喪失という状況を克服する道を示すものとなろう。

ハイデガーのキー概念に Sorge（気にすること、関心）という語がある。「時間性は関心の存在意味」^{x v}ともいい、了解（Verstehen）というのも単なる認識ではない（Verstehen）というのも単なる認識ではない

く「存在は、それがなにものかへ向けて企投（Projection）される限りでのみ了解される」^{x vi}という意味である。主体のそのような働きこそが重要なわけであり、そういう意味でハイデッガーの「脱自態」や「脱自場」も、ポストモダニズム哲学のデリダやドゥルーズが言う「差延」や「差異」も人間疎外、主体喪失の危機にある現代社会における主体回復のための重要な概念装置となる^{x vii}。 Time is Money の顕著な現代社会と全く正反対のようにズレるスロースペースなる言葉をここで提起するのもそのような意味からである。

そのような例は探せばいろいろ出てくる。そんな議論が巻き起こることが大事なことである。最近、これもそうかと再認識した身近な事例を一つ。私が属する NPO 千葉まちづくりサポートセンターは地域通貨ピーナツでも知られるようになつたが、地元のゆりの木商店街が実践の場となったことが大きい。この商店街のリーダーの海保氏に言わせると、西千葉駅前に千葉大が陣取っているために、これまで商店街は一度も栄えたことがないという。そこで NPO 千葉まちづくりサポートセンターと出会い、ピーナツの導入によってそれ自体は経済的にどうということはないが、人と人とのコミュニケーションが活発になったことが大きいという。そして街灯や街路樹の足元を花で飾る活動が商店街から住宅地へも広がり、地域の景観にも変化を与えるようになった。この花の広がりにも地域通貨の普及が効果をもたらしている。先に活性化や景観整備と大上段に構えるのではなく、人と人とのつながりを楽しむ、そんな肩の力を抜いた気楽な取り組みが意外と本質であるかのようだ。

補注：（この文章は報告書『スロースペース』（2002.1）の一部を加筆修正したものである）

■はじめまして

私は主に地方自治体が文化財指定する建造物修理の調査・設計・監理を業務としている。修復建築家、とも呼ばれるが、建築家という言葉は他のする呼称と考えているので、いわば古屋の造作といったところだろうか。

業務の対象は歴史的建造物とか伝統的建造物と言われるが、ここでも的とつけるのはいささか問題を複雑化させると、個人的には考えているので、歴史建造物とか伝統建造物としたい。ここで建造物というのは、もちろん建築を含むが、橋梁、隧道、

墳墓、石塔等も含む文化財上の定義である。業務としては文化財指定を受けていない建造物も含むが、本稿では主に文化財と記すこととする。業務の内容は、制度上の区分としては、町並み保存と単体文化財とに大別される。個々において、作業上それほどの差違はないが、問題認識としては多少異なった対応を要求される。一般論としては、町並み保存の場合、生活利便が優先される面が強くなり、歴史的となる側面が多くなる。

業務の範囲は名古屋を中心に半径 100 キロメートル内外で、きわめてローカルな世界に

保存修理の現場 にて

林 廣伸
HAYASI HIRONOBU

株林廣伸建築事務所

身を置いている。そのため、私の認識や判断も偏ったものとなっている恐れがあるが、「井の中の蛙天を知る(?)」かも知れないのでご勘弁をいただきたい。

ただ、文化財修理においては、現代における建築と多少異なった座標で建造物や、集落を観察することとなり、その異相による発見も興味あるものではないかと考えている。

■文化財修理の現場

文化財の保存修理の現場においては、いささか通常の建築現場とは異なる判断が求められる。

歴史建造物においては創建当時の姿をいかに伝えるかが重要であり、当初の部材、仕様、形態がまず要点となる。一般的には時代を遡るほどその姿が美しいといわれている。そのためだけではないが、修理においては当初部材の存続が重視される。時間を内包している部材は他に置き換えることが出来ない。

文化財修理において原形に復する行為を「復元」ではなく「復原」と記すが、このことも創建された時代や、今日までの時間を伝える物理的根拠に基づいていることを示している。

また、埋蔵文化財が発掘によって破壊されるように、文化財の修理においてもその行為によって失われるものも少なくない。そのため解体する範囲をいかに少なくするかも重要となり、消失データを記録することも必要となる。

自明のことだが、私の業務対象は既存である。そのため、先人の仕事の跡をたどることとなる。正確にトレースすることが求められ、恣意を差し挟むことは出来ない。滅私奉公の世界である。

私の体験でのもう一つの共通項は、その対象がすべて木造ということである。今日、近代建築の保存も議論されているが、木造か否かでその対応を区分する必要があるのではないかと感じている。

■職人の世界

前述のように、修理においては当初部材の存続を図るために、欠失や、損傷部分に限ってその部材を補足する。そのため修理後においては眼前に二つの仕事が併存することになる。

その場合歴然とするのは、時間を内包している存在感とともに先人の技術の確かさである。新たに取付けた持送りなどの姿もなかなか様にならないし、とりわけ、石の加工についてはその差が大きい。

このような相違の因はどの辺にあるの

だろうか。かつての石工の日当はその日にはつった石屑の量で決められたと聞く。まずは圧倒的な体力が必要とされ、省力化とは程遠い。職人の世界の変質といってしまえば簡単だが、さらにその因はと問えば、問題は広く深そうである。私自身がその一因を成しているのかも知れない。

ある老陶芸家は、「先生の絵付けは早すぎる。」との問い合わせに、「70年と数秒だ。」と応えたと言う。日常性の集積が問題となるのだろうか。

また、町並みを考えるとき、その主要構成要素である建造物がいかに没個性的であることに気付かされる。にもかかわらずその町並みが個性的であるという逆説めいた現象はどのように考えるべきであろうか。職人の世界に潜む「日常」、「普通」や「無名」がキーワードなのだろうか。

■自然との関わり

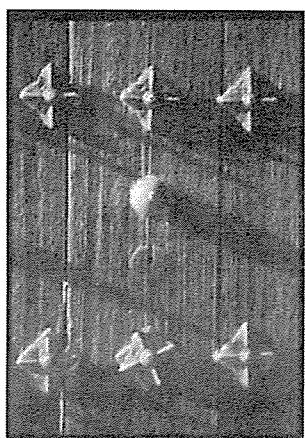
我が国における伝統建造物の構成要素は、周知のように木・土・石・瓦等々であるが、いずれも、地域としても再生時間においても身近なものを多用している。とりわけ木は腐るという特性を有している。歴史建造物は大きくその地域と自然に関わってきたと考えられる。

全事象は自然と人、人と人の関係に大別されるが、人対人の関係はともかくとして、自然と人との関係は一方的に、かつ、圧倒的に自然が優位である。人間は、ただただ、自然の現象に追随せざるをえない認識すべきだろう。とても「自然と共生」とか「地球(自然)にやさしい」ことなど及びもつかないことがある。元来、自然は人間にとてやさしくない関係であり、そのため、人々は自然を神と崇めていたのだと思う。

■保存を通じて

通常の建築行為の中で、保存は少数派に属することは明確であろう。文化財の場合は「文化財保護法」という法制下にその保存が図られるが、一般論としての保存に対する認識はうすい。その理由として、現代における効率や利便の優先が指摘される。だが、人々の営為において効率を追求することは必然であり、また、何人もそれを阻止し得ない。効率や利便を一方的に無視することは出来ない。このことは、自動車公害を批判しつつも、我々の日常が自動車に依っているような、いわば原罪のようにも感じられる。

同様に「自由」「平等」「正義」が声高に言われている今日、個人が私権に制限を加えることはできない。この権力を有するも



時間を内包した表情。欠失した部材形状も「風喰」差によりその一端が判明する。

暮らしの場としての歴史的環境における観光のあり方について

水尾 衣里

MIZUO ERI

名古屋女子文化短期大学
助教授

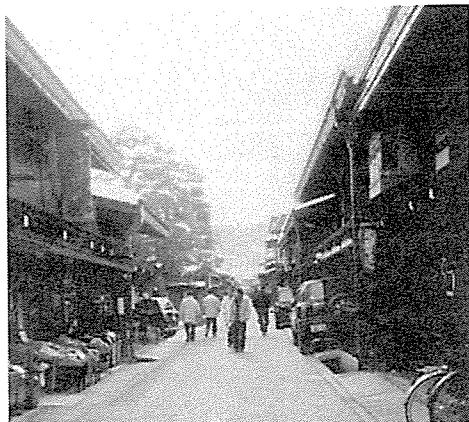
のは限られている。

優秀なスポーツ理論家が有能な競技者ではないように、理論とともに、実践としての実効性が求められる。歴史に耐えられ

る透徹した思考や、強靭な意志と柔軟な対応を有する行政力に期待されるところが大きい。それは、住民すなわち私達自身の問題でもある。

飛騨高山市を訪れた観光客は昨年（平成13年）は320万人を超えた。世界遺産に指定されている白川村も昨年は140万人の人が訪れている。高山市や白川村の地域のアイデンティティを形成している伝統的な町並み・建築物が保存・再生されている景観や自然環境が主要な集客要素であることは間違いない。しかしそれは必要最低の条件としての存在であり、なにより多くの人々を魅了するものは、その地域に暮らす人々の実際の「生活」がそこにあるということであり、訪れる人々が味わいたいのもその生活の上に成り立っている生きた歴史的景観なのである。

高山市でもっとも人気のあるところは「古い街並み」と云われる町の中心であり商人の町として発達した三之町地区である。三之町地区的保存計画は、景観保全と生活維持の両立を目指して、街路に面したファサードを保存しながら、裏手を増改築することによって現代の生活に合った空間を確保するという形で行なわれた。こうしたファサード保存の努力の結果、街路からの景観が保全され人々を魅了する町並みを創り上げた。ここを訪れる人の多くはそれぞれに自分自身を古い町並みの中で、日常の生活ではもはや味わうことができない日本の昔にタイムスリップさせ、そこでしばらく時間を止めて楽しむ。平成5年に観光客の数は200万人を超え、以後徐々にその数を増やしている。ここ十年の月別観光客数を見てみると、春、秋の祭りのある月と夏休み時期にあたる8月に多いことは当然と



高山市三之町地区の町並み

感じるが、平成10年以降、1月、2月の観光客の数が増えつづけているのである。加えてこの時期には総観光客中に占める宿泊客の割合も多い。このことは人々が「古い町並み」という舞台を観るというところから、さらに深く生活の中に自らを置き、伝統的・歴史的な文化に浸った時を過ごしたいという欲求の表れとみることができる。飛騨地方の冬は厳しい。その厳しさこそがそこでの生活や文化に大きく影響し飛騨の特色として残っているものであり、現代人はそこで生活する人とその厳しさを共有しながら古き時代の失ったなかを再生させ心を癒すのである。

白川村は合掌造り集落とその周囲の自然環境が良好に保存されており、その中心となる荻町地区は昭和51年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、平成7年にはユネスコの世界文化遺産に登録されている。平成以降の観光客の入込み状況を見てみると、平成7年までは年間60万～70万人で推移していたが、平成8年に一気に100万人を超え、平成13年には140万以上の人気が押し寄せている。今年（平成14年）の秋には東海北陸自動車道の白川郷I.C.（仮称）の富山側が開通予定であり、交通量、観光客がさらに増加するものと思われる。白川村においてもこれだけの人々を惹きつけている理由は伝統的な集落の景観や自然環境だけの魅力ではない。ここでもそこに生活があるからである。

高山や白川村を見ると、歴史的に貴重な町並みや建築は景観としての形が残っていればいいというものではないとつくづく思い知らされる。白川村の荻町に野外



白川村の合掌造りの民家

博物館合掌造り民家園というのがある。白川郷各地の離村民家をいくつか移築保存し、展示されているところである。確かに心置きなく合掌造り住宅の中を見学、学習することができる貴重な施設だとは思うが、実際の集落から受けるような感動や魅力は少ない。そこには人々の生活がないからである。建築や街は器であり、器は中身によって生かされていると痛感する。

歴史的町並みがあらゆる意味で貴重なものと認識され、その魅力が伝われば伝わるほど観光客は一時に大挙して来る。キャパシティを超えた観光客や観光交通が押し寄せた結果、そこで日常生活が脅かされ、居住環境や自然環境が悪化し、資源的価値をすり減らしている現実がある。白川村では村にふさわしい交通体系を実現するため、地域内への観光交通流入の排除と地区外道路の混雑の解消を目的とした交通社会実験が平成13年10月に実施され、現在観光と保存地区の生活環境維持の良好な方針を模索している。地域の人々の努力と観光

客の協力と理解によって歴史的資産を守るためにルールがやっと作られようとしている。わが国の重要な資産である歴史的景観や伝統的町並みの整備や保存はこの生活が実現されていることこそが重要であるということがこれまで以上に認識され、難しい問題が多くありながらも行政、地域の人々、景観デザイナーや建築家が共に努力することによってあるべき姿を実現していくだろう。しかし、同時にそうした地域を訪れる人々・観光客のあり方が議論されなければならない。地域の人々が快適に営める生活の上に歴史的資産が成り立っていることを再認識することが必ず必要である。それは教育以外にはない。団体を送り込む旅行社をはじめ、訪れる側の深い理解と認識によって適正なシステムが構築され運営されることが必要であると思う。地域からの多岐にわたる情報発信とそれに目を向け理解するための「環境教育」が良好な景観を形成するための第一歩であると考える。

湯布院発「ひと よこい」な まちづくり

寺川 重俊

TERAKAWA SIGETOSI

寺川ムラまち研究所

平成10年3月に策定された「湯布院町商工会地域ビジョン」の中に示されている「5つの総合ビジョン（行動指針）」の1つに、中心部のまちづくりの考え方として「歩くことが楽しいまちづくりをしよう」という項目が掲げられている。

そして、このビジョンの中に次の4つのキャッチフレーズが示されている。

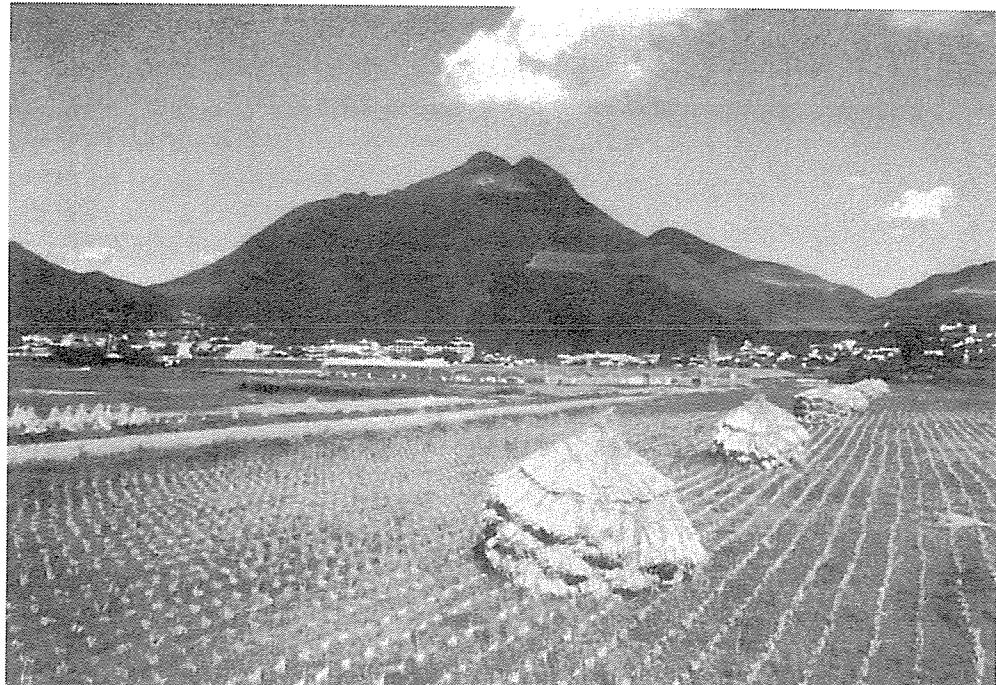
【時速4kmのまちづくり
- 歩くまちをつくる】

【10分歩いて「ひと・よこい」
- ポケットパークをつくる】

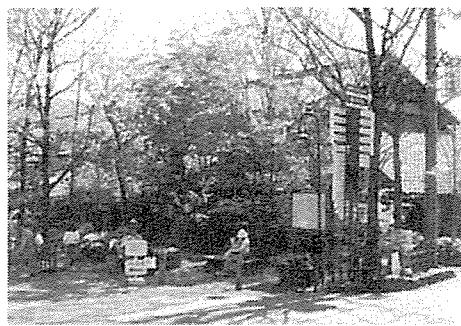
【辻裏に路地裏- 路地文化の
創造・出会いの場】

【お寄りませ・よこいませ運動
- 歩道アーバー】

(店の中に歩道がずるずる入っていく)



藁子づみと由布岳



ポケットパーク



はかりや前

こうした、人のペースや尺度を基本とし、人が癒されるようなまちのあり方は、湯布院のまちづくり理念の底流にある考え方であろう。

「ひと・よこい」というのは、ちょっと一休み・ひとごこちといった意味の湯布院弁であるが、なにやら湯布院の時間の流れを象徴している気がする。

湯布院の観光は全国ブランドとなり、年間380万人とも400万人ともいわれる観光客が押し寄せているが、その魅力は何なのか。よく生活観光地と形容することがあるが、この「生活」という要素を「日常」という概念に置き換えると、観光行動という非日常活動で日常を体感しにやってくるということになる。問題はこの体感することによって「癒される」日常とは何かである。

湯布院はかつて貧乏なむらであり、あるものは温泉と自然・風土と人間、そしてどこにでもある暮らしの文化だけである。それしかなかったから、磨くのは自分の感性であり、求めた豊かな暮らしは、豊かな感性によって手に入れようとした。あるものと、それによって積み上げてきた暮らしの文化や知恵を、広い知見と豊かな感性で見直し、湯布院流のものにリファインしてきた。そこに、田舎の良さと洗練された感性による豊かさが融合した湯布院らしさなるものが生まれ、育まれてきた。そこに共感して訪ねて来る人との時間の共有が、

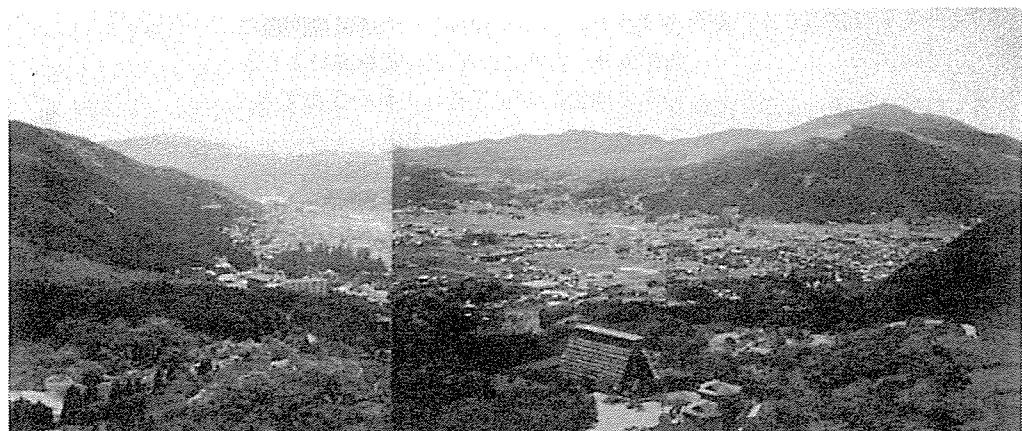
お互いを癒し、さらに感性を磨く。そんな営みが湯布院の魅力の核となるところにある。

そして、このような営みの背景に自然がある。盆地のスケール感と由布山のシンボル性は、ヒューマンスケールの囲まれた安心感と確かな方向感覚・位置性による安定感をもたらす。また、450～500mの標高と全国第3位ともいわれる温泉の出がもたらす適度な湿気の心地よさ（これは「べたべた」ではなく「しっとり」と感じる）、微妙な気圧の低さから、文字通り重力という肩の荷を少し下ろし、少し薄い空気を腹一杯吸うことの気持ちよさ、といった身体感覚がある。

さらに、「農のペース」がある。自然とまっすぐ向き合って行う百姓仕事がもたらす農の環境により実感する1年間の時間の流れがある。そしてそこには弥生時代からの農の時間が凝縮している。

今、湯布院を訪れる観光客のどれほどが上記のような「癒される」日常を体感しているか分からぬが、確かにここにはそれがある。

冒頭の4つのキャッチフレーズが示す中心部のまちづくりは、まさに湯布院のあるべき「自然と人のペース」と「自然に対しての人の身体感覚」を大切にするまちづくりの基礎的要件のような気がする。とりわけ「ひと・よこい」なまちづくりとして湯布院全体がスローなポケットパークな



湯布院・盆地風景

のかもしれない。

そして、そのような空間を環境・建築デザインとしてルール化しようとする試みとして「ゆふいん建築・環境デザインガイドブック」（「ムラ」の風景をつくる－農村文化に支えられる、いやしの里の豊かな暮らしの風景）がある。機会があれば一見あれ。

今年は、植物や動物の営みがすべていつもより早い。山菜や桜、田植えの時期、ホタル、さらに山の虫たち。気のせいだとよいのだが、まるですべての生けるものが死に急いでいるかのようである。湯布院も何とかしなければと思う。

都市環境のライフサイクル制御

永松 栄

NAGAMATU SAKAE

地域デザイン研究所

生命の機能に、新陳代謝、運動、成長、増殖があるように、都市にも新陳代謝、運動、成長、そして増殖がある。都市が動くものであるためには、都市を比較的動きにくい部分から激しく動く部分までの多種な寿命の序列を考えるのが有効であろう。

（黒川紀章、都市デザイン、1965、紀伊国屋書店）

高度経済成長期における拡大成長する都市を念頭に書かれた文章と思われるが、ここに書かれたライフサイクル（寿命）に関する視点はこれからの都市環境デザインにこそ必要だと思われる。それは、都市の拡大と土地利用転換をコントロールし、都市環境づくりに伴う無駄を排除しながら、都市生活の質を高めることが我々に求められているからである。

都市環境づくりの無駄

東京大学で建築生産を研究する松村秀一が編集したデータによると 1990 年頃の住宅ストック数を年間供給フロー数で割った数値は、イギリス 141、アメリカ 96、フランス 86、日本 30 となっている。この数字を、住宅ストックの平均ライフサイクル（単位：年）と呼ぶと、日本でいかに短いライフサイクルで住宅が使い捨てられているかがわかる。こうした住宅供給の無駄の認知から、近年、我国でも建築のライフサイクルを伸ばし、地球環境問題に対応させ、同時に住生活の質を高めようという方向性が官产学それぞれから出てきている。

一方、都市環境づくりでは同様のメカニズムの無駄として、土地利用ライフサイクルの問題が想定される。都市環境といふのも、もとをたどれば広範囲の部分は農地、森林、海水面などである。そこに特定の土地利用に見合った都市インフラが整備され、特定の都市的土地利用地に転換する。そして、新たな土地利用が百年以上維持さ

れる場合もあるし、工場街区などのように数十年で他の用途に転換する場合もある。

いずれにしても、マクロに見て宅地不足が解消している状況下で、土地利用転換フロー面積が沈静化してこない場合、つまり、土地利用ライフサイクル（都市的土地利用地ストック面積 ÷ 転換用地フロー面積）が伸びてこない場合は、どこかに都市環境づくり上の無駄が潜んでいるはずである。

建築部位のライフサイクルかみ合わせ技法

日本の住宅のライフサイクルが伸びない原因の一つは、ライフサイクルの長さが構造躯体の寿命ではなく、内装や設備の耐用年数に引きずられていることがある。つまり、比較的動きやすい部分の寿命が、建築全体の寿命を決めているのである。こうした無駄を抑えるために、オランダの建築家ジョン・ハブラーーケンは、建築部位毎の耐用年数や意思決定集団の違いに着目して『オープンビルディング』という建築デザインの考え方を提唱している。これはまず、住宅団地などを以下の 3 つに区分することを求める。

- 『アーバンティッシュ』と呼ばれる
街区レベル
- 『サポート』と呼ばれる
建築構造躯体レベル
- 『インフィル』と呼ばれる
内装・設備レベル

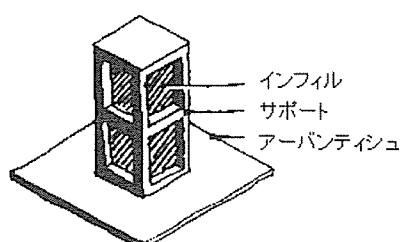


図 1 オープンビルディングの 3 レベル

さらにデザイン決定に関して、アーバンティッシュを最上位に位置づけ、インフィルを最下位に位置づける。こうした上で、下位階層に置かれた建築部位の更新・交換が、上位階層の部位の変更を求めるように全体を設計する。こうすることで、交換サイクルが短く、かつ個人の意向反映が求められる内装・設備の変更工事が、上位の建築構造躯体の変更や建築構造躯体を共有する集団の合意を前提にしないで実施可能になる。

このような、建築デザイン上のレベル着目は、確実に建築ライフサイクルの延長を可能にすると考えられる。

オープンビルディングの都市環境への応用

このオープンビルディング概念を応用して、都市環境づくりの無駄を予防することを考えてみたいと思う。このために、以下のような用語定義をしてみたい。

●アーバン・インフィル

都市の中の一定の土地利用単位を住宅内部の間仕切りや設備（インフィル）になぞらえて『アーバン・インフィル』と呼ぶ。アーバン・インフィルのライフサイクルは、概ね建築レベルのライフサイクルに追従する。また、アーバン・インフィルの新規設定や更新は、概ね民間投資家の意欲に依存している。

●アーバン・サポート

都市の土地利用コントロールの枠組みや都市インフラシステムを、建築の構造躯体（サポート）になぞらえて『アーバン・サポート』と呼ぶ。アーバン・サポートは、一般にアーバン・インフィルよりライフサイクルが長く、特に都市の成熟安定期においては構造的変更はあまり見られない。これらの意思決定や投資は一般に地域社会全体が行う。

●地域ティッシュ

アーバン・インフィルやアーバン・サポートを支えている地域資産の総体、つまり土地、自然、地場産業、地域文化が織物（ティッシュ）となった価値を『地域ティッシュ』と呼ぶ。地域ティッシュは守るべき地域資産の総体であり、100年先、200年先に受け継がれるべきものである。これらの価値判断と擁護実施もまた、地域社会全体が行う。

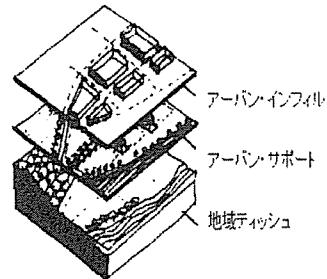


図2 都市環境デザインの3レベル

このような概念整理をした上で都市環境づくりの無駄の一例を整理すると以下のようなる。

都心のアーバン・インフィルが老朽化し陳腐化し、ユーザーや投資家から見放され放置される。他方で商業・業務機能や住機能の受け皿として郊外や埋立地に新たなアーバン・サポートを敷設しながら新街区を形成していく。結果、建設量が増大するとともに、無言のうちに地域ティッシュを傷つける。また従来、地域ティッシュに負荷をかけながら新郊外住宅地として供給されたところでも、居住者の代替わりが円滑に進まず、当初入居世帯の高齢化とともに人口が減少し、アーバン・インフィル更新に必要な活力が鈍ってくる。このアーバン・インフィルの更新に向けられるべき投資意欲は、適正な地域社会コストを負担せずに地域ティッシュを食いつぶす新住宅地建設プロジェクトに向かっている。そのプロジェクト現場は最近まで、農地や海水面であったところであり、そこにアーバン・サポートとアーバン・インフィルをゼロから建設しようとしている。

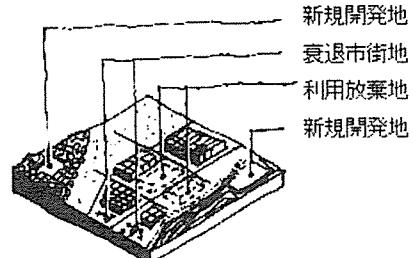


図3 都市環境づくりの無駄イメージ

これらを放置すると、しまいには、古くなったアーバン・インフィルがリサイクルされずに使い捨てにされて、蓄積するという恐ろしい状況が待ち受けている。こうした現象は、アメリカのアバンドンと呼ばれる放棄住宅地、社会主義時代に更新のための投資がなされなかった東欧の都市中心部、西欧工業地帯の閉鎖工場施設群などで現実のものとなっている。

結論

アーバン・インフィルの新陳代謝は基本的に、①利用放棄、②現状更新、③用途転換、④新規開発である。このうち地域ティッシュを傷つけることから、なるべく避けるべき新陳代謝は、①利用放棄、と④新規開発である。(図4 参照)

地域ティッシュを傷つけないでアーバン・インフィルを新陳代謝させるには、以下のことを考える必要がある。

(対策1) 現状更新が可能なアーバン・インフィルが老朽化している場合は、既存のアーバン・サポートを生かしながら更新させることで新規開発需要を抑え込む。

(対策2) 従来用途では利用放棄を免れないアーバン・インフィルは、用途転換させて新規開発に向かう需要を吸収する。

この対策を実行に移すには、都市計画システムや都市インフラシステムといったアーバン・サポートによって、明確に都市区域をコントロールすることが必要である。同時に、アーバン・インフィルの用途転換の条件となる、場所、新規機能、投資家のマッチングをはかる必要がある。

土地あまりを見せるような都市においては、利用放棄地の新規用途として建築施

設用地ばかりでなく、公園緑地系の土地利用を積極的に補完すべきであろう。この場合、利用放棄地の中から緑地化優先順位の高い場所を洗い出す必要がある。場合によつては、かつて破壊した緑地を再生させる計画もありえよう。現実にドイツ・ルールの旧鉱工業地域再生では緑地システム計画を使って、産業遊休地を使った市街地整備と緑地整備が同時に進められている。

(図5 参照)

こうした例はいくつかの国ベイエリア再生に共通に見られるようになってきている。実際、将来、返還される米軍用地を抱える沖縄本島中南部や、太平洋沿岸、瀬戸内、筑豊といった構造不況に見舞われるベイエリア、工業地帯などでは、こうした都市環境管理コンセプトの有用性は疑いの無いものであろう。(図6 参照)

我々、都市環境デザイナーは、「土地、自然、地場産業、地域文化が織物(ティッシュ)となった地域資産の総体(地域ティッシュ)」を明らかにした上で、「都市の中の新陳代謝する単位(アーバン・インフィル)」の更新を適正化することを考える必要がある。そのための道具、手立て、仕掛けとして「都市計画や都市インフラシステム(アーバン・サポート)」を21世紀の地

①利用放棄		
②現状更新		
③用途転換		
④新規開発		
	アーバン・サポートとの関係	地域ティッシュとの関係
①利用放棄	利用停止	環境負荷あり
②現状更新	変更なし	変化なし
③用途転換	変更あり	変化あり
④新規開発	新設	環境負荷あり

図4 アーバン・インフィルの新陳代謝

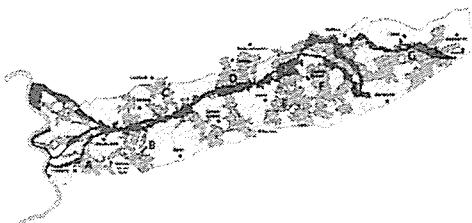


図5 ルール地域の緑地システム計画



図6 沖縄本島中南部都市圏の軍用地分布

域社会と都市を念頭に鍛えていかなければならぬだろう。

都市再生や自然再生といった新たな公益事業を組み立てていく際にも、ここで述べてきた時間軸の中で変容する都市環境を合理的に管理するイメージを持つことが成否の分かれ目になるだろう。

最後に、冒頭の引用文を参考にして結語をつくろうと思う。

参考資料

- ①黒川紀章, 都市デザイン, 1965, 紀伊国屋書店
- ②住環境再生研究会, 住まいのリニュー
アルとまちづくり, 1993, アサヒタウンズ
- ③澤田誠二+藤澤好一, サスティナブル社会の建築, 1998, 日刊建設通信新聞社

生命の機能に、新陳代謝、変化、成長管理があるように、都市にも新陳代謝、変化、成長管理がある。地球環境、地域環境そして地域コミュニティに配慮しながら、必要以上に都市環境を動かさないで市民生活の質を高めていくためには、都市環境を比較的動きにくい部分から激しく動く部分までの多種な寿命の序列を考えるのが有効であろう。

- ④宇沢弘文+茂木愛一郎, 社会的共通資本, 1994, 東京大学出版会
- ⑤Leitplan Emsherp Landschaftspark, 1992, KVR
- ⑥「持続可能な開発・沖縄モデル」国際ワーキングショップ, 1999, 沖縄県

ブロックサポートプログラム

代表幹事会ブロックサポートプログラム

■東北ブロック総会訪問記

2002年4月1日、盛岡市の中津川沿いの地域交流館「おでって」において開催された、東北ブロックの総会に参加した。総会には会員14名中13名が参加し、東北ブロックと北海道ブロックの合同交流会（2002年2月16日、函館市）における「町並みフォーラム in 函館」の報告、公共空間実態調査の報告（秋田の竿燈、青森のねぶた、横手のかまくら等）がなされたほか、都市環境デザインガイドブックの編集内容について熱心な議論がなされた。また、学生会員や準会員制度に関する質問が寄せられ、その仕組みやブロックにおけるメリットについて説明させていただいた。その後、懇親会が催され、岩手の地酒に囲まれながら、都市の問題に加え、自然との付き合い方の問題など、地域ならではの話題

で盛り上がった次第である。

盛岡は北上川、零石川、中津川の三川が合流する内陸の水であり、開運橋から眺める北上川越しの岩手山の風景は美しく、また市民の景観に対する意識の高いことで知られる。この市民意識の高さが、街中を流れる中津川の堤防整備（パラペット設置）に対する一種の防波堤ともなっている。本会の活動がこのような地域の個性を守り、育てることに一層寄与していくべきだと再確認した訪問であった。

ところで、代表幹事が地方ブロックを訪問するのは、関西ブロックに次いで2回目である。今後ともブロックの実情やブロックで抱えている問題を把握し、本会の活動に生かしていきたいと考えている。（代表幹事 伊藤登、八木健一）

川井 由寛

KAWAI YOSHIHIRO

SLA タジオラント・ジャパン株
代表幹事

■7月13日（土）、10:30～12:30、品川区天王洲アイル地区MIビル25階会議室において第12期定例総会が開催された。出席者42名に、有効委任状166名を加えて総数208名の参加があった。出席者数は、定例総会開催に必要な総会員数484人（権利停止中の会員7名を除く）の3分の1の定足数である162名を超える、総会は成立した。

■第1号議案では、新役員承認の件について選挙管理委員会、高見 公雄氏より役員選挙結果の報告があった。代表幹事当選人として、伊藤 登（留任）、鳥越 けい子、中井川 正道、江川 直樹（留任）、川井由寛（留任）、澤田 晴委智郎（留任）、八木 健一（留任）、柳田 良造、杉山 朗子、丸茂 弘幸（留任）、の10名が、また監査役当選人として、大塚 守康、成瀬 恵宏、両名が選出された、との報告があり、以上の結果について、拍手によって承認された。

■第2号議案では、第11期活動報告及び収支報告承認の件が報告され、また第3号議案では第12期活動計画及び収支計画承認の件がはかられた。今年から会議時間節約のため、代表幹事、各委員会委員長及びブロック幹事など各報告者が第11期活動報告及び収支報告に引き続いて第12期活動計画及び収支計画を説明した。

第11期は、本会の過去の活動を総括しつつ次の10年に向けた活動を具体的に開始した一年であった、ということで、会員制度の改革による準会員、学生会員資格の創設、ホームページの正式運用の開始、都市環境デザインガイドブックの取りまとめ、などが報告された。

代表幹事会活動では、ブロック活動や委員会活動との連携方策の検討、より多様な活動を誘発するプログラムの検討、ブロック活動に対する支援策の充実を図る一環として、各ブロックに代表幹事を派遣するプ

ログラムを開始したこと、などについて報告がなされた。

第12期においては、引き続き日本社会が大きな変革の途上にあることを強く意識して次の10年を見据えた活動の起点を形成するためのプログラムを検討していくことが求められる、との認識のもとに、①様々な地域で活動する、多様な分野の専門家集団である本会の特色を活かした活動の充実、②対社会的な情報発信と交流の促進（インターネットの積極的な活用、行政機関、教育機関、一般市民の積極的な参加交流など）、③組織運営の改善（・ブロックの枠を超えた活動を推進する体制をつくる。・長期的な視野にたって、委員会活動の見直しを含む本会の組織としての形態を検討する。・柔軟な予算配分方式の検討を行う。・若手会員の積極的な参加による多世代型の運営組織を形成する。）、④財政基盤の強化（会員・協力法人の増強、財政支出の縮減など）などが提案された。

■委員会活動としては、活発な委員会もある一方で活動事態が停滞している委員会もあり、委員会のあり方を基本的なところから考えなおす必要性が指摘された。また情報通信特別委員会についてはホームページの本格開設という所期の目的を達したので第11期をもって解散する。

■ブロック活動としては、委員会活動と同様、ブロックにより活動の活発なところもあればやや停滞ぎみのところもあるという状況である。そのなかでも公共空間利用実態調査、都市環境デザインガイドブックなどの作業を通じ、ブロック内でのつながりが深まったという話も報告された。また他ブロックとの合同セミナーなどの新しい動きも見られるようになっている。準会員、学生会員の増強については各ブロックとも重点と考えているようであるが、今ところ成果についてはブロックによってばらつきがあるという状況である。

■第11期収支報告については、フォーマットを変更し予算額、決算額、差異を明記するように改めたこと、入会預り金、会費の明細、次期繰越金 2002年5月31日現在の繰越金の明細を明記するようにしたこと、などが報告され、この収支報告が資料の通り相違ないことが監査役より報告された。第12期収支計画については、委員会活動の見直しも含め、委員会活動費を縮小した予算としている。

■自由討議は、昨年のブロック幹事会などで出された意見を元に JUDI の今後に向けた意見交換をテーマに行われた。それらの項目は、①JUDI の会員のメリットなど基本的な観点について、②ブロック活動の今後について、③委員会活動の見直しについて——委員会の本来の在り方も含めて見直してみる、④全国レベルの研修・研究に

について、⑤問題解決的な委員会があつても良いのでは?などである。またこここのところ代表幹事会で話しあってきた項目としては、⑥公募型研究テーマ募集について、⑦代表幹事会とは別に JUDI の将来を考えるワーキングの創設、などであった。全体的に日本社会そのものが抱えている問題を JUDI としても共有しており、それぞれの会員個人にとってもなかなか難しい局面であるが、そのなかでもブロック独自のホームページ開設や NPO 化へむけての研究など、地域の特色を活かしたブロック活動という JUDI 本来の主旨が再確認されたこと、また委員会そのものの見直しや公募型研究テーマ募集などにみられるよう、よりフレキシブルな活動をサポートする制度の研究など、新しい改革のスタートを切る総会となった。



第12期定期総会の様子



総会後開催された第5回 JUDI パネルディスカッション

事務局より

1. 新会員の紹介

2002年5月1日～6月30日の入会者は下記の通りです。(入会順、敬称略)
6月30日現在の会員数は、496名です。

正会員氏名	勤務先(フック)
松下 潤	芝浦工業大学システム工学部(関東)
藤崎 浩治	(株)都市環境研究所大阪事務所(関西)

準会員氏名	勤務先(フック)
柴垣 英俊	富士通(株)(関東)

2. 退会者(2002年5～6月)

朝倉悟、飯塚矩規、今北紘一、小林英嗣、田口彰、田中直子、中山義光、三谷康彦、安原武彦、吉羽逸郎、呂斌(敬称略)

3. 住所変更等(敬称略)

氏名	変更内容(新)
大村 虔一	宮城大学事業構想学部事業計画学科 〒981-3298 宮城県黒川郡大和町 学苑1 Tel022-377-8346 Fax022-377-8390

氏名	変更内容(新)
澤田 晴委智郎	(株)澤田造景研究所 〒470-0115 愛知県日進市折戸町枯木21-87 Tel05617-3-8207 Fax05617-3-8246
谷口 庄一	名古屋大学大学院環境学研究科 〒464-8603 名古屋市千種区不老町 Tel052-789-5728 Fax052-588-6551
児野 登	(株)アーキディック 〒390-0852 長野県松本市島立 1132-25 Tel&Faxは変更なし
平澤 薫	(株)ユーピーエム 〒141-0021 品川区上大崎 3-13-21-110 Tel03-5791-2100 Fax03-5791-2155
南 正晃	(財)千葉県まちづくり公社 〒260-0013 千葉市中央区中央 4-13-28 Tel&Faxは変更なし
森 延彦	静岡県都市住宅部都市整備総室 Tel054-221-3351 Fax054-221-3640
山川 良子	(有)ワイズ環境デザイン室 〒350-1142 埼玉県川越市藤間 903-4 Tel049-247-0540 Fax049-247-0540

広報・出版委員会

澤木 俊間	石崎 均
土田 旭	伊藤 光造
近田 玲子	河本 一行
菅 孝能	森川 稔
中嶋 猛夫	横山あおい
櫻井 淳	加茂みどり
松村みち子	吉田 慎悟
白濱 力	作山 康